

## 第Ⅲ部 講演記録

将来計画委員会主催講演会（2000年3月1日）

### 『教養教育とは何か』

共立女子大学 学長 阿部 謹也

桑村将来計画委員長（司会）：

教養部の将来計画委員会が毎年開催しております恒例の講演会に、今年は阿部謹也先生をお招きしました。教養部以外の部署にも案内させていただきましたので、もう少しお見えになるかと思いますが、定刻になりましたので始めさせていただきます。

私は今日の司会を担当いたします教養部の桑村です。それでは教養部長の中田先生のほうから、ご挨拶と阿部先生のご紹介をお願いします。

中田教養部長：

この間聞いたアメリカ人のジョークで、女の人には年齢を聞いてはいけない、男には給料を聞いてはいけない、大学にはその目標を聞きちゃいけないというのがありました。きっと、教養部に「教養とは何か」と聞きちゃいけないんじゃないかなとも思いますけれど、今日は「教養教育とは何か」というタイトルで、阿部謹也先生に講演にお越し頂きました。社会学部長の中内先生のご紹介で、こうして阿部先生のような素晴らしい方をお迎えすることが出来たのは、教養部としてとても幸いなことだと思っています。

中京大学に『八事』という評論誌がございます。この1987年の第2号「大学とは何か」という特集号の中に、阿部先生がお書きになった記事がございます。えっ、どうしてだろうとお思いになるかも知れませんが、その頃から阿部謹也先生と中京大学は関係があったという証拠でございます。

私たちは、先生がお書きになった『大学論』、或いは『「世間」とは何か』、『「教養」とは何か』、もちろんその外にもたくさんございますけれど、こういうご著書を読ませていただいています。今日は阿部先生、本当にお忙しいところありがとうございます。拍手でお迎えしたいと思います。

司会：

それでは、阿部先生には1時間あまりお話頂まして、その後15分ほど質疑応答の時間をと考慮しております。予定では5時までということになっております。それでは、阿部先生よろしくお願います。

阿部先生：

最初にちょっとお断りしておきたいんですが、昨日、一昨日あたりから風邪をひいたらしくて、喉の調子が良くないので、お聞き苦しいかと思いますが、ご勘弁いただきたいと思っています。

「教養とは何か」という題で、既に本を書いておりますが、この問題については、2つ、今まで私の考え方で発表の場所があったわけです。1つは、社会の中で、教養とは何かという定義をする場合、つまり一般の人々にとって教養とは何だろうかという、そういう問題を考えるということがあります。もう1つは、大学の中での教養教育はどうあるべきかという、こういう問題点も当然のことながらあるわけで、今日はその両方にまたがってお話をしなければいけないと思っています。

## 教養とは何か

教養という言葉については、誰もが教養という言葉は知ってるわけですが、しかし、実際「教養とは何か」ということを正面から議論しようとする、かなり意見が異なっている場合が多いのです。

多くの人は、例えば、書物をたくさん読んでいて、古今東西の書物に通じている、そしてまた外国語が読める、さらに一種の書齋派の人間であったりすれば、それだけでも既に教養がある人というふうに位置づけたがるわけです。これは冗談半分に言うんですが、もし教養がある人と見られたら、そう難しいことではないよ、というふうには私は答えています。

例えば、ダンテの『神曲』の、全部を読む必要はないので、洒落たセリフがあればそれを覚えておく。そして、しかるべき時、そこが難しいところですが、適切な瞬間に、しかるべき引用をして、「これはダンテの『神曲』だよ」と言えば、みんなわっと驚いて、その一瞬にして「教養がある人」という評判を得ます。しかし、その評判を維持する為には、その他の機会においても、しかるべき、やはり、何らかの言葉を用意しなければいけない。それがもし少しでもずれていけば、もちろん一瞬にして失墜してしまうことになるわけです。知識には、どうしてもそういう性格があると思えますね。

日本の場合は、例えば、人の名前が読めないということがあるとすれば、比較的著名な人、誰もが知ってるような人の名前が読めないということがあるとすれば、そこで「教養を疑われる」ということがあるわけです。大昔、もう数十年前ですが、テレビ番組を見ていた時、日本人の思考方法についての3人か4人の討論だったんですが、私は何か分からなかったんです。どういう議論しているかも、はっきり覚えておりませんが、少なくとも日本人の「思惟」というテーマについて話していたんですが、一人の人が「しすい」というふうに読んでたらしいんですね。後で分かったんですが、はじめはそれが分からなくて、ぼんやり聞いていたら、突然、対談者の一人が「あ、あなたは『思惟(しい)』のことを『しすい』とおっしゃるんですか、それでようやく分かりました。」と大きな声で言って、それでその「しすい」と読んでた人は、ちょっとまあ赤面したんだろうと思うんですね。

「思惟」という言葉、これはあの中村元先生の本などで知られてる「東洋人の思惟」とかあるんですが、そのような言葉が日本の場合は教養などを試す1つのテストケースになってしまうわけです。ヨーロッパやアメリカだったら、「think」とか、「thought」とか、「Denken」とか、そういう日常用語で使われるものが、日本ではどうしても学術用語になった時に難解になっている。これはまあ、誰もが指摘することではありますが、そういうことがありまして、教養というのは、身に付けるのは結構大変なものだというふうには言われているわけです。

そこで、教養というものを勉強しようとする、例えば『広辞苑』は、みんな使うわけですから、

ちょっと読んでみるわけです。そうするとですね、これは第4版だと思いますが、こう書いてあるんです。「単なる学殖・多識とは異なり、一定の文化理想を体得し、それによって個人が身に付けた創造的な理解力や知識。その内容は時代や民族の文化理念の変遷に応じて異なる。」と、まあ辞書の書き方はこんなようなものなのでしょうが、例えばこの文章を理解しようとするれば、「文化」、「理念」、「文化理念」とは何か、二回にわたって出てくる「文化理念」とは何かということを知らなければいけない。「一定の文化理想を体得し」ていなければいけない、これは何を意味しているのか、ということを考えますとですね、この『広辞苑』の「教養」という概念そのものが既にもう難解なわけですね。

これは恐らく、ヨーロッパとか、アメリカとか、西欧系の学問をした人が、西欧系の学問の中で教養というものを位置づけると、こういうふうになるんだらうと思うんですが、私はむしろ、単純に考えたい、というふうに考えています。どういうことかと言いますと、これも別にわざわざプラトンを引用するまでもないんですが、ちょっと引用させてもらいますと、プラトンの『パイドン』という本の中に、こういう文章があるんですね。人が死ぬ時に、あの世に持って行く物がある。それは、自分で作り上げた性格と「教養」だと日本語の訳書には書いてある。もちろん、別の訳によっては「教養」とはなっていませんので、訳し方もいろいろあるかと思いますが、まあ「教養」でも悪くはない言葉ではあるわけです。まず、「自分が持って生まれた」ではなくて、「自分が作り上げた性格」を持っていくということは、まあ、仕方ないとしてですね、「教養を持っていく」というふうに書いてある。これは、大学人にとってはかなり重大な問題で、その「教養」の中身は何か、ということが問題になります。

『パイドン』のあちこち読んで見ても、それに当たる答はすぐには出て来ないんですが、他の本、例えば『国家』とか、いくつかの書物にはその答えがあるんですね。それはどういうことかと言うと、プラトンは死んでから後のことに非常に興味を持っていた。彼は不死ということを感じていたので、と言うよりも信じようとしていたので、人間の魂は死なないんだというふうに思っていて、それを証明したかった。『パイドン』なんかその典型で、証明しようとして証明しきれなかった訳ですね。

私は実は、ごく最近、自分の仕事のまとめをしたいなあと思っている中で、プラトンに関わっていて、中世において『ティマイオス』というプラトンの宇宙論が、どのように受け止められたかということを今ちょうど書いている最中なんですね。そこでまあその問題に相当前にぶつかったわけですが、どういうことがあるかと言いますと、例えば一番分かりやすいのは、彼の『国家論』なんですね、その中にこういうことがあるんです。ある男が死ぬんですね。この男は死ぬべくして死んだんではないんで、一応あの世に行って、また戻って来てその状況を報告する使命を帯びている男なんですね。この男は、まあ細かいことは忘れてしまったのでお話ししませんが、とにかくある場所に行くわけです。そうすると、そこにこれから彼があの世界で生きるべき人生のモデルがたくさん並んでいるわけです。そのモデルを自分が選ぶ訳ですね。選ぶには、大勢の死者が来ますから、くじ引きになるわけです。くじを引いて、その1番の人から順番に、自分のこの次の人生において生きたいモデルを選ぶわけです。

例が書いてありまして、ある人は例えばアガメムノンがそこに居たわけですが、アガメムノンは「自分は王様ではもう飽きた。大空をゆうゆうと飛んでいたい」と、まあそれだけではないと思いま

すが、そういう生活を選んで驚になったわけです。そこで用意されている人生のモデルには奴隷もあり、タイラントもあり、動物もあり、もちろん、豚なんかもみんなあるわけですね。そこで、ということが考えられるかと言いますと、プラトンは死後にそういう経験を何回も繰り返すんだというふうに書いているんですね。魂は不死ですから、死んだ後、この現世が終わった後もそういう人生を繰り返す。その人生を繰り返す時に、今の例で言えば人生を選ぶわけですね。例えばアガ멤ノンが驚の生涯を選んだのは、彼が王じゃなければ選ばなかったかも知れない。つまり、現世における生き方というものがあるのが彼の死後の生き方を規定しているというふうに考えられるわけです。

つまり、アガ멤ノンが王でなければ、むしろ貧乏人であれば、王様の地位を選んで、その人生を生きたいと思ったかも知れないんですが、人それぞれで、いろんなやり方をするわけです。ということは、もう一遍生きて暮らすとすれば、現世における自分の経験に基づいてもう一遍人生を選ぶ、こういうふうに見える。それが彼の言う「教養」だとすればですね、非常に簡単なことなんです。私はそのことを読んではと思ったわけではなくて、裏付けになるなと思ったんですが、それはどういうことかと言うと、私は相前から、教養について定義したということじゃないんですが、教養とは自分がいかに生きるかということと社会との関係の中で位置づけていく作業だ、というふうに決めていたわけです。

### 教養教育とは何か

自分で勝手にそう決めていたに過ぎないんですが、たまたま教養部の改革というものが各大学に押し寄せて来た時に、私は国立大学の一教員であったわけです。そしてそれ以後、学部長とか学長とかを経験する中で、教養教育というものについて発言する機会が多くなってきた。そういうこともあって、私は今のようなことをもう少し固めて行ったわけです。例えばですね、最初に学長になったのは、平成4年ですが、その時に一橋大学のOB会は、当時はお金があったからでしょう、今でもそれ位のお金はあるんだと思いますが、5月にですね、1年生全員を招待するんですね。で、2回に分けて立食パーティーで500人ぐらいずつ、1,200人居るんですけど、600人全員は来ませんから、500人ぐらいずつが、如水会館で一番大きなホールで集まって、かなりのご馳走を出して、学長、評議員、学部長、それからOB達、OBもですね、昔はと言うか、私が最初の頃は渡辺美智雄とか、石原慎太郎とか、いろいろいましたが、今では政治家は非常に少なくなり、せいぜい頑張っても山本コータローとかですね、後は財界人になってしまってる訳ですが、そういう人たちと話をするわけですね。

そういう機会がありまして、その時に、ある学生が数名でやって来ましてですね、私にゼミナールを開いてくれと言ったわけです。どういうことかと言うと、高校時代から私の本を読んでいて一橋に受かったら私のゼミに行こうと思っていた。ところが、学長になってゼミがなくなっちゃったと聞いて、残念だからゼミを持ってくれ、とこういう要求がありました。そこで、君たちみたいな学生が10人いたら考えようと言ったらですね、確かに10人ぐらいいたわけですが、後から来ましてですね。そこで、単位はあげられない、そして月に一遍しか出来ないし、きちんとしたことは出来ないが、それでもよければ、やりましょうと言って始めたことがあるんですね。

その時に何をやったかと言うと、これは前から私のゼミでやっていることなんです、一人ひとりに、自分は今何故ここにいるのか、ということに対して答えを出してもらおう。それは分かりやす

く言うと、親との関係、兄弟との関係、友人との関係、高校教師との関係について、一人ひとりが400字で20枚ぐらい書いてくる。どうしても書きたくないという人がいたら、それはそれで構わない。書かなくてもいいんだが、しかし音楽とか、絵とか、何でもいいんで、好きなものについて、同じくらい書いてきて下さいと。それを一人ずつが、1回2時間のゼミ時間を予定して研究室でやるんですが、それを発表してもらおうと、非常に発言が多くなります。つまり一人が話していると他の学生達は黙って聞いてないんですね。「お前のところもそうか」「うちもそうだ」とか、共感を示す声が非常に多くなって、最初の半年ぐらいはそれで終始してしまう。終わったらですね、どこかへ飲みに行き別な話をしようよと私が言っても、別な話にならないんですね。最初は、だいたい1年生の前半は、予備校の話と自分の親とか、兄弟とか友人の話で終わってしまう。そして、半年ぐらい過ぎるとまあ、私が多少誘導することもあって、徐々に学問の方向に向かうことになるんですけども、それがですね、私は、教養の基礎転換教育だと自分で勝手に考えていたわけです。

そして、一橋大学は元々教養部というのはありませんので、学科目教官として教養部担当教官はいたんですが、全員が一応学部配置されていた。しかし、学部配置されていても、全員がドクターコースの担当になれる訳ではないし、学科目教官ですから、国立大学の中ではやはり講座制の教官とは給与においても差があったわけですね。そういう面で、やや問題があった。その問題を片づけなければいけないという段階の時に、当然、教養教育をどうすべきかという議論が起こってくる。今でもそう思うんですが、自分の、私自身の今ちょっとだけお話したような教養論というものを言えなかったんですね。つまり、こういう形で私自身はやってきたし、もう20年もやっているわけですが、学長になってから単位なしでやってる、そういうゼミナールはわずか数年間やっただけですが、それ以前に20年もやっている。けれどもですね、そのやり方というものを公にしたことはないんです。

一遍ですね、テレビで、確かNHKで、教養教育のあり方についてインタビューみたいな形でやったことがあります。これはですね、東京大学の小林康夫さん、アサヒビールの樋口廣太郎氏、それから、建築家の安藤忠雄さんですね。この3名の方とお話をした時に、小林さんは今のような話について、そんなことは大学でやるべきことじゃないと、そういうことが済んだ人間が大学に来るべきだと、こうおっしゃった。それはそうだと思うんですね。昔はそれができたんだと思うんですが、現在はそれができない。まあ東京大学の場合は分かりませんが、私も教えたことがあるので、そう違わないと思ってるんですが、そこで、違う、違わないと議論しても始まりませんから、別な話になった訳ですが、彼はそういう意見でして、後の二人は基本的にはそういう考え方に同意されるという形で話が進んだわけです。

問題はですね、なぜ大学で言えなかったか。なぜ、私はこういうふうになっている、したがってそのやり方に賛成する人はそういうふうになっていただきたいと、言えたら良かったと思うんですが、言えなかったというのはですね、やはりこれはかなり人によるんじゃないか、というふうに思うからなんですね。つまり、私自身が自分がやっている教養教育みたいなものを、自分で位置づけるに当たっては、一人で考えたわけですから、それも相当前に、これは最初に教えた大学から既にやっているわけで、20代の頃からやっている。それが結果として上手くいったかどうか、未だによく分かりませんが、少なくとも私自身は、そういう教育を受けたかったと思っていたと思うんですね。それでやってみたんですが、それがなかなか他の先生方に言えないんですね。で、実際そ

ういうことを何らかの文章に書いたりするので、それをお読みになる先生方がいらっしゃって、感想が漏れてきます。そうすると、まあ、ああいうことは学長に任せておけばいいんだ、というふうな発言になってしまいますので、なおさら私は言いにくくなるということがあります。

それ以後、問題は、教養教育というものが、現実に大学の現場から消え去りつつある。中京大学は教養部を残している、非常に見識のある大学ですから、問題状況は同じだと思いますけど、少なくとも教養部というものは残そうというところにはですね、はっきりと言って教養理念を何らかの形で守りたい、あるいは、新しく作っていききたいという意気込みが感じられるわけですから、本学の先生方は、多少違うと思いますが、ほとんどの大学の先生方は教養教育というものをやるんだということについては誰も否定はしない、これからもっとやるんだとおっしゃるんですけど、じゃあどういう教養教育をやるのか、ということについてはですね、答えがない。

ごく最近、東京新聞から『東京大学は変わる』という本を送って来て、書評してくれっていうんですね。それで私は読んでみたんですが、東京大学教養学部の先生方が、既にご存知の通り『知の技法』とか様々な本を出されて、一種の教養教育の改革を心掛けている方々が中心になって『東京大学は変わる』という単行本を出された。その中で何をおっしゃってるかという、やはり教養教育の再定義なんですね。その再定義の中身は何かと言うと、一番基礎は人文・社会・自然という3教科を止めてしまう。これはいわば「大綱化」と全く同じなんですね。そしてそこに共通科目とか、総合科目とか、いろんなもの入れていく。他の大学がやっていることとほとんど変わらない訳です。どこの大学でも、大体そうになっている。そして、ほとんどの大学で1、2年次ではなくて、3、4年次も含めた全学年で教養教育を行うということになっている。その点でもあまり変わらない。

『東京大学は変わる』という本の中身を見ていると、こういう形で変える、制度を変えたということは、もう歴然と分かるわけですが、制度を変えたことによって、教養教育というものが、どういふふうに行われているのかということの実態はもちろん分かるわけじゃない。どうも日本の国は、大学も含めてですね、制度を変えればいいという風に思っている節がありますが、私はそうではないと思うんですね。

実は、今日ですね、列車の中で、何を読んでいたのかははっきり覚えていないんですが、たまたま、手元にあった雑誌を見ていたらですね、ある人が、各企業を分析する、その分析の仕方について書いていまして、名前も忘れてしまいましたが、その中でこういうことが書いてありました。社長と会長に会って5分話せば分かっちゃう。社長と会長に合って5分話せば、その企業はどんな企業か分かるを書いてあるんですね。全く同じことを石川忠雄さんがある会の席上でおっしゃったんですね。

ご存知の通り、元の慶応義塾の塾長ですが、それは大学、国立大学を独立行政法人化するという話題が出てから何年間か後に、去年の4月か5月に、文部省に、文部大臣の下に8人の委員を置くということで、私もそこに入って8名の一人になったわけで、その時に石川さんもたまたまその委員になられていて、そこでの発言です。つまり、彼は大学設置委員会の委員も長くやられた中で、「各大学の図書館の蔵書数とか、ハードの面の設備とか、そんなこといくら調べたって大学の将来は分かりませんよ。それよりも、理事長と学長にですね、顔合わせてちょっと話をすれば、すぐ分かります。」私はそうだろうと思いました。「しかし、審査は、これで分かったから、これなんかはこうだと言えないところがあるので、苦しいんです。」というお話だったんですが、まあ、そういうも

のだろうと私も思いました。

ということは、どういうことかと言うと、教養教育のいわばあり方について、どんなに議論を重ねても、あるいはどんなに制度を変えても、講義そのものが学生を興奮させなければ、発憤させなければ、それは何も変えたことにならないという、厳しい事実があるわけです。

そこで、ちょっと私自身の過去の経験に基づいて、お話したいと思うんですが、戦後米国の影響下で教養教育の改革が行われて一般教育になった時に、さっき言った人文・社会・自然という3教科の併存と言いますか、並立が決められたわけです。そして、それがずーと守られてごく最近まで、平成3年までやられて来たわけですね。

そこで、各大学については議論があります。例えば、そういう教育、一般教育の専門家は養成していないので、一般教育を担当する人は、それぞれが例えば物理の専門家であったり、国文学の専門家であったりする人達で、その人達は、専門教育を受ける能力もあるし、大学院担当能力もあるのに、たまたま運が悪くて、あるいは、何らかの評価の結果、教養教育担当になった、こういうふうに理解されている。そして、学生側から見ますと、教養教育と言っても、実際は、高等学校の延長線上にあって、面白くないと。ですから、一般教育と言わずに「般教」なんていう名前で呼ばれていて、馬鹿にされていたと思うんですね。そういう議論はいっぱいある訳ですが、私はその中で、1つだけですね、全然議論されてないものがあったと思うんです。

### 世界像と人文・自然・社会の連繫

それはどういうことかと言うと、人文・自然・社会ですが、この3つの教科の関連についての議論がなかったんじゃないかと、比較的最近考えているわけです。どういうことかと言いますと、高校生の立場になって考える、あるいは大学に入ったばかりの学生の立場で考えますと、我々はどうか学生達はみんな、私自身もそうでしたが、世界像を求めているんですね。つまり、そういう言葉は知りませんから、「世界像を探している」なんて言いませんけども、私の高校時代、中学時代を考えると、例えば自分が読んだ本を見てもですね、それを通して世界が理解出来るようになりたい、世界というもの分かりたいと思っていた。これを分かりたいと思う、思い方はかなり深刻なんですけども、しかし、大学はそれに応えてくれなかったわけです。

私自身はどうしたかと言うと、そこで部分的にはいろいろと発憤させられることもありましたが、山に逃避して、ほとんど1、2年の間は山登りばかりやって、それも一人でほとんど山に入っていた。そんなことでは、何の解決にもなりません、そうやってまあごまかしてたわけです。

今思うにですね、例えば、人文・自然・社会という3教科というものの間に相互の連携があって、例えば、人文の先生と、自然の先生が来年度はこういう講義をしたいと思っている、その間の調整をどうしようかということ話し合えたとすれば、素晴らしいと思うんですね。しかし、日本の学者の世界では、それはあり得ないことなんです。それはどういうことかと言うと、明治の頃から、文科と理科、文系と理系というものがはっきりと分けられていて、今でもそうですね。私は学術審議会の委員をまだやっているわけですが、そこで例えば人文・社会系の審査をする。そうするとですね、そこに例えば1億円とか何億円という単位のお金を目指してですね、候補者が来るわけですが、自然科学に比べると寥々たるものです。人文・社会系の例えば領域開発とか、COEとかでせいぜい4倍、5倍の倍率、これが高いくらいです。

したがって、猿の研究とか、オランウータンの研究なんかやってる人が人文・社会系の研究に流れ込んで来るわけです。そちらのほうが有利だからですね。人文系の先生方は、あまり応募したがない。1億円貰っても、その管理とかが面倒臭いし、100人もの人を動かすためには、自分の学問が出来なくなってしまう。いわばマニファクチュア段階の学問が、あるいは、手工業段階の学問が、人文社会系の学問のように見えちゃうわけです。応募が少ない、それに対して、文部省の側は、人文社会系をもっと増やしてくれ、みたいなこと言いますが、実際はですね、到底そうならない。自然科学の方が膨大なお金を貰っていて、しかも報告書もろくすっぽ出ていない状態、つまり、タックス・ペイヤーの立場からすれば、論外なことが現実に行われているという状況があります。その際に文系、理系の区分というものは決定的なんですね。

ところが、東大の場合もそうですが、リベラル・アーツに改組する、転換すると言っている。それで私はリベラル・アーツという言葉には非常に興味がありますし、これはもともと中世の自由学芸から来ているので、中世の自由学芸についても多少は勉強し、本来のリベラル・アーツのあり方についても何らかの知見を得たいと思っていますが、近代のように、自然科学等々が発達した中でのリベラル・アーツというのは、そう簡単ではない。つまり、中世の段階ですと、まあせいぜいのところプラトン、アリストテレスを理解する、あるいはニコラウス・クサヌスのあたり、あるいは、イタリアのフィチーノとか、その辺を理解しようとする時に、幾何とか、あるいは、数学とか、多少の天文学の初歩的知識があればほぼ十分だったんですね。

しかし、現在はそうはいきませんから、本当のリベラル・アーツは容易ではないことは確かですが、しかし、不可能ではないと思うんですね。これはあちこち、と言っても2カ所ぐらいに書いたことなので、お読みになった方もいらっしゃると思いますが、私は大学に入った時にショックを受けたことがあるんですね。それはいい面でのショックなので、お話してもよろしいかと思いますが、一橋大学では、今はもうないかも知れませんが、現代数学という科目があった。これは1年生の必須科目だったんです。私は、高校時代から数学が嫌いで、厳密に言うと数学が嫌いだったんじゃないことが後で分かるんですね。つまり、計算が嫌だったんです。それを数学が嫌いだというふうに自分で思ってしまっていたんですね。

高校3年の時に盲腸で半年入院していたことがあって、その間に腹膜炎を起こして、なかなか直ぐに退院させてくれなかったもので、上向きで寝たままで、受験勉強が出来るようにというので書見台を買ってもらって、右手で書いていると疲れますので、そこで、書かないで済む、つまり練習問題をやらないで済むような本を探してもらったら、名前を今でも覚えているんですが、平野次郎という人の代数学か何かは忘れましたが、大きな本があったんです。この本をですね、朝から晩まで読んでた。そうしたらですね、一次方程式、二次方程式等々の原理が見えてきて分かったんですね。それで退院してから、もう高校3年も終わってしまう頃に退院してですね、そこで、今度は別な本で練習問題やったら比較的解ける。そこでちょっと馬鹿にしたわけです。つまり数学はパターンだと。これは根本的な間違いなんですけど、500ほどのパターンを覚えておけば大抵の算数の問題は解けるということが分かった。その限りで事実なんですけど、それでは夢も希望もない、面白くなかったわけですね。

かろうじて大学に入れてもらったんですが、その時に必修科目で現代数学を取った。そこで非ユークリッド幾何学を学んだわけですが、その中に試験問題の例として、教科書に「一辺が1センチ

メートルの直方体の中に全宇宙を込める手続きについて述べよ」というのがありまして、中味はなんにも分からなかったんですが、非常に感動したんですね。そういうことが考えられるとしたら素晴らしいことだと思って、一生懸命読んだのです。たかが知れてることではあるんですが、要するに長さが10メートルの棒と1メートルの棒と長さが等しいということが証明できるという話から始まるわけですが、1対1対応として知られていることですが、しかしこれは、高校生の狭い知見を打ち破るには、十分な材料だったということです。

同じことをごく最近も経験しました。どういうことかということ、白川静さんという人の『初期万葉論』という本を読んでいたらですね、柿本人麻呂の、皆さんご存知の歌があるわけです。

ひむがしの野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ

という歌です。これ、皆さんご存知だと思いますが、日本人の大半はカルチャーセンターとか、あるいは国語の教育の中で、万葉の歌を叙景歌として学んでいるんですね。私自身も小学校の時に合唱部にて、課題曲として山部赤人の歌か何かを歌わされたことがあります。私自身も叙景歌だと思っていました。ところが、白川静さんという人は、立命館の白川先生ですが、この歌について「呪歌」という言葉を使って解説されていて、これは私にとっては非常に興味があるものでした。

どうしてかと言いますと、中世においてですね、詩とか歌とかというものはヨーロッパの話ですが、大体において、呪歌的要素を持っているんですね。歌われている歌詞の中にある言葉が、その通りの現実を生ませるために、現実を生むように仕向けるために歌が歌われる。したがって、イバラ姫が生まれた時に、大勢の魔女がやって来て、贈り物をする。全部言葉なんですけど、その言葉は、それによって「美人になりますよ」とか「才能のある子供になりますよ」というのは全部、これ贈り物なんですね。で、最後に「この子は死ぬのではなくて、100年間眠り続けるんです」ってこれも贈り物なんです。つまり、現実を生み出す力が言葉にはある。で、今の歌も確かそういう状況の中で書かれていたということ、そういうものとして解釈されていたと思います。

が、もう1つ驚いたのは、その事ではなくて、この問題を白川先生ではない別な方が、この歌は何年の何時頃できたのかということ、東京天文台に問い合わせたという下りなんですね。そうしたら、東京天文台からきちんと答えが来まして、確か陰暦の11月17日、つまり持続6年の、太陽歴では西暦692年12月31日の午前5時50分頃ということでした。私は何回も読みまして確かめたんですが、まだ専門家に聞いてないんですね。これは大変面白い事実だと思うんですね。

どうして、まずこんな細かいことまで分かるのかということも聞きたいですが、そのことよりも、どういうふうにして、そういう答えを出す手続きが踏まれたのか、更にまた、東京天文台へ問い合わせるといふ、発想そのものがどこから生まれたのか、そしてまた、答えるという勇気もですね、天文学者にあつたわけで、これはなかなか面白いことだと思うんですね。

もし、私が、学生時代1年、2年生の頃にこういう講義を聞いていたら、恐らく非常に興奮しただろうと思うんですね。つまり国文学、これは国語学とかあるいは万葉の話でも、だいたい高等学校で聞いた話はずまらない話が多いわけです。天文学そのものは興味があるんですけども、天文学の基礎はやはり数学なので、私が嫌いだった数学で、それで天文学者になりたいと思つた夢が、既に高校の段階で砕かれている時に、こういう話を聞けばですね、非常に発憤すると思うんです。

教育というのは、そういうものではないか、と思ったわけで、そこであえてこういう例を申し上げたんですが、この例だけではですね、人文・社会・自然というものが、前もって先生方の打ち合わせで準備ができるという、そういう証拠にはなりません。なりませんけども、少なくとも両者が対応していることは明らかで、しかも、人間の世界、人間が関わっている世界を、分析し描こうとしているという点では、人文・社会・自然の全ての科目は同じだと言っていいと、私はあえて申し上げたいと思うわけです。

という意味で、私自身も自分の仕事がそろそろ終わりにかけている、もう終わる年齢に差し掛かっているということもあって、ごく最近、古代のプラトンの宇宙論というものが中世になってどういうふうを受け止められ、そして、それはどうなっていくかについて、ちょっと勉強しているわけです。これもう終わりにかけているので、ちょっとだけお話しすると、実は、プラトンの宇宙論も含めた作品は中世に入った瞬間にと言うか、入る前に既に散逸してしまって、ばらばらなんですね。ところがクリバンスキーという人がその後を丹念に辿りまして、どこに何があるということ確かめていって、意外に中世には残っていることが分かった。4世紀にはカルキディウスという人が、『ティマイオス』宇宙論の翻訳も半分ほど出しまして、そして細々と研究が続いた。学生達は行間にですね、欄外に註を付けて書き込んだりして、それは残っていますが、『ティマイオス』を読んでいる証拠があるわけです。

結論的に言いますと、まだ結論に至っていないんですが、プラトンは生涯でいろんな問題を考えていましたが、1つ不死の問題についてはどう考えたかということ、プラトン学者もたくさんいらっしゃると思うので、最初からもうシャットアウトされる可能性も高いんですが、私は『ティマイオス』もその1つじゃないか、つまり不死を証明するものじゃないか、というふうに考えているわけです。その具体的な問題については、いずれ私の書物が出た段階でお示しできると思いますが、ということも考えてですね、人文・社会・自然の3教科というものは、全体として1つの教科のように教えるべきではないか。つまり、天文学が教えている宇宙像と、国文学者が持っているはずの世界像とが、全く交わらないものであるはずがない。それが交わるような形で講義の準備をすべきではないか、というふうに考えたわけです。これは、自分に出来ることでもない、誰に出来ることでもないんですが、しかしそういう方向を目指すべきではないか。そう考えた時に、例えば一般教育とか、教養教育というものは、若い先生が若い時代にですね、教えるべきものではないと私は思うんですね。つまり、相当の年齢の、つまり学がいわば熟している人たちが基礎になってやるべきことではないかと。

一番大事なことが忘れられているわけで、それは文部省のほうでも、そうなんですが、何らかのですね、構造を教えればいいのかと思っているように聞こえます。そういうふうに聞こえて来る。つまり文部省の大学設置審議会の状況も私は知っておりますが、確かに図書館に本は何冊あるか、そういうことは調べる。しかし、新設大学はどうするかということ、そこに来ることになっている先生から、今はそういうことありませんが、書物を借り出して、それを陳列して審議会の先生が来る間だけ置いておいた。そういう大学がたくさんあります。そういうふうにして、その審査の間だけごまかして済ませるわけですね。ですから、そういうことは別として、教養教育というものはそういうですね、特定の科目のここまで教えればいいのかということではない、したがって、学問の基礎ではないんだ、と私は考えているわけです。

一橋大学では、ある時議論がありまして、他学部の科目を取るということは必修になっているんですが、他学部の科目を取るのにそれにはどういう根拠があるか。ある人が「経済学部の学生にとってみると、法学部の講義は教養だ」と。そうすると法学部の先生は、何となくむかつとしてですね、「ちゃんと我々は専門教育を行っているんだ、専門の授業をしているんだ」とおっしゃるんですが、まあそこは理解の問題で、また、教授の仕方や講義の仕方の問題もあるわけですが、一番大事なことは、教養教育においては学生を発憤させることなんですね。

つまり、学生が興奮するような、新しい世界像を示すということが一番問題で、それがかつての一般教育には欠けていたのではないかと。そしてまた、学者の中には、そういうことは良くないと考えている人もいらっしゃるんじゃないかと思うんですね。

私は、余計なこと申し上げてしましますが、今、女子大に初めて行きまして、そこには家政学部という学部があります。明治19年の頃からそういう学問を教えていて、正岡子規の妹さんなんかは子規の看病をし、子規から非常に酷い目に遭わされながら徹底的に看病した後、共立女子大、当時の専門学校に入り直して、そこで身を立てる術を学んで、実際に一生食べて行くんですね。そういう教育を行ってきた大学なんです。

私は改革の方向として、まず家政学部に男子を入れろということを主張していて、まあ、OG会と多分ぶつかるだろうと思うんですが。どうしてかと言うと、家政学という学問、話が少しずれてしまいますが、これはですね、資本主義経済が展開していく中で、経営と家計が分離してできてきた。つまり家計というのは、経営に参加する人を養う場なんですね。ですから、家計は女性が守る。女性が、例えば、戦争中の銃後の守りみたいですね、戦いに行く経営戦士を送り出す為に家庭を守る。そういう意味では、いわゆる良妻賢母を育てるという、典型的な女子大教育の場だったんですが、その家というのはですね、実はエレン・スワローという、アメリカのMITの教授がいますが、彼女の100年前の研究によれば、これは正に環境汚染から人類の生活を守る最後の砦なんですね。家庭で守らなければ、もうアウトなんです。それをスワローは既にはっきりと分かっている、今で言えばダイオキシンとか、そういったさまざまな汚染物質というものを解明する、食品分析を通して解明する学問というものを、これをですね、エコロジーというふうにして位置づけて、家政学の中心に置いたんですね。

私はそれは、全く正しいやり方だと思いますし、それは、女性だけに任せることではなくて、例えばここにいらっしゃる先生方は、多くは男性で、私も実際に女房に全部任せちゃってる状態ですから、偉そうなことは言えませんが、これからは恐らく家というものは、男と女で持つものだと、こういうふうを考える。そうすると、家政学は、男と女が学ぶ学問で、作り上げていく学問だということ打ち上げる必要がある。

ところがですね、そのことを言うと同時にですね、やはり学生を集めなければなりませんから、当然、被服というところでは、堅実な被服、身体にとって良い被服というものを考えるだけではなくて、モードとか、あるいはですね、様々なそういう、いろいろな最近の流行も考えて先生を採用したらどうか、と言いますとですね、うちの家政学部はそういうものに対して反発してできてるんです。流行を追わないと。堅実な衣服は何かという、さっき先生がおっしゃったことは、正にそのことを目指してやっているんですと。それは大変敬意を表すべきことではありますが、何か戦争中のモンペを作っているような気がしますと言いましてですね、そのところも将来変えてもらえるよ

うにお願いしているんですが、それは余計な話として、問題はですね、男女を問わないで、そういう学生たちが、「発憤する」教育が行われるかどうかです。

## 個人と教養と社会

そこで、もう一遍、その教養教育に戻るわけですが、問題は、教養教育というものについて、現在のところ、ほぼ全員が了解しているもう1つの重要な項目があるんです。それは、教養というものは、一人で身に付けるということなんですね。これは、私の考えでは、ヨーロッパに個人が生まれた12世紀以降に生まれた考え方だと思うわけです。

どういうことかと言いますと、教養というものを、先ほど言いましたように、単なる知識とか、文化理念と結び付けるのではなくて、いかに生きていくかということと、結びつけるとすれば、そして、人によっては、死後の生き方まで規定するものだとすればですね、それは個人が成立して以後、生まれてくるものではないかと思えます。どういうことかと言いますと、「いかに生きるかということ、社会との関係の中で自覚していく作業」というふうに教養を位置づけるとすれば、当然のことながら、12世紀以前の人々も、農民も手工業者も、漁民もそういう生活をしてきた。

NHKに朝のモーニング何とかというのがあります。たまたまニュースを見ていて、消し忘れるとそこを見ちゃうことがある。そうするとですね、アナウンサーが出てきて、老人を何人か紹介して、男女ともなんですが、この人たちが朝御飯には何を食べているか、ということを見て回る番組なんですね。日本中回っている。そして、確かに珍しい物を食べている人もいますが、ごく普通の物を食べている人もいます。そこで、「こういう朝食を召し上がっているから皆さんお元気なんですね」なんて話になるんですが、これ私は間違いだと思ってる。私が見た限りでは、全てみんな働いている人なんです。その老人たちは、何らかの形で常に現役で働いている人たちなんで、健康で、また我々が見てもいい顔して生きている人たちは、働いているからいい顔で生きていられるし、健康でいられる。朝飯が何かによるのではないんだ、というふうに常に思っている訳ですが、NHKはそれを固守している。時々NHKに私も行って喋ることもあるんで、その話をしますと、みんな知ってるわけです。しかし、その番組は全く変わりませんので、多分その考え方の違いがあるかと思えますが、少なくともですね、一人で教養を身に付けるということはある得ないと私は考えている。

どういうことかと言うと、今流行りの言葉に「幸せ」というのがあるんですね。たまたま1回だけ私は、共立の学生達に誘われてコンパに行ったことがあります。これも勇気のある学生達なんですね。新しい学長が来た、どういう学長か、一遍コンパに誘って見てみようっていうことで来たんだと思いますが、その時にチャンスなんで聞いてみたんです。「何が幸せだ」と。答えられないわけです。面と向かって聞かれますとですね。そこで「別に立派な答えは期待してないから、思った通り言えばいいよ」と言ったら、やはり一人ひとりが例えば「健康」「お金があること」とか、「社会的地位があること」とか、そういうこと言うわけです。じゃ健康について考えようと、例えば乙武君の『五体不満足』という本を読めば、これはですね、ヘレンケラーの言葉らしいんですけども、「障害は不便だが、不幸せではない」とはっきり書いている。彼にそういうふうにかかれてしまえば、普通の人間、五体満足の間人は、それ以上健康に生きて言うことはないだろう。更に貧乏だけでも、幸せという人はいっぱいいます。更に地位は無いけれども幸せだという人はいっぱいいる。

「ところで、君たちはどういう状態が幸せなんですか」と聞いてみると、瞬間については答えら

れるんですね。しかし、持続的な幸せというものについて答えられない。それは当たり前だと思うんですね。この世に生きていて、生物でありますから、やはり常に危機にさらされている状況の中で、常に将来を見越すような安定した生活ができる訳ではない。うんと若い時はそれができるといふ幻想を持ちますが、我々の年齢になれば、明日に倒れても不思議がない状態で、まあそこまで若い人は考えないとしても、そういうふうには考えないものだと思うんです。しかし、やはり幸せを求める。そういうことを、例えばカトリックの司祭なんかは言うわけですね。日本でカトリックの洗礼を授けたり、あるいは結婚式を授けるときに信者でない人が結婚式やってくれとくと、そのときには10日ぐらい通わせて、幸せとは何かを教えるんだというんです。そこでどういうことを教えるのかと聞くと、やはり「相手を中心にして考える」ということを教えると言っていました。私はそういう考え方が必要だと思うんですね。つまり幸せというのは自分一人では成り立たないんです。誰かとの関係において幸せっていうことがあるのだと思うんです。

言い換えれば教養も同じで、社会の中で生きていく、その生き方を社会との関係の中に位置付けるということは、社会は棒切れではありませんから、やはり人間集団なんですね。人間集団の中に自分を位置付けるっていうことを意味するわけで、そこで関係というものが常に出てくる。その関係の中で自分の教養が身につく。どういうことかという、自分がこの社会の中でどういう位置にあるのか、何をしているのか、社会の動きにきちっと対応しているかっていうことが理解出来るわけです。そういうときに教養がある状況だと、私はそう考えているというふうな話をするわけです。

言い換えれば、12世紀にヨーロッパで個人というものが生まれてから、これは比較的最近の説で、昔はルネサンスと言っておりました。皆さんの中の多くの方はルネサンスで個人が生まれたという説を学んでこられたと思いますが、最近では12世紀なんですね。例えば恋愛は12世紀に発明された、こう言われています。それも通説です。どうしてかという、恋愛は個人がいなければ成り立ち得ないっていうのがヨーロッパの考えですから、個人が出来たときに恋愛は初めて生まれた。従って『アベラールとエロイズ』が出現して始めて恋愛が可能になった。フランスの宮廷風恋愛っていうものが1つのモデルになるわけです。12世紀に個人が生まれたということは、そのころに人間がヨーロッパで少なくとも内面というものを自覚したということです。内面を自覚するにいたったきっかけは何かというと、コンフェッション、つまり告白（告解）という制度がカトリックにありまして、罪を司祭の前で全部告白して許しを得るといふ、今でも行なわれている儀式があって、それが人間の悩みを救っていったということがあるからです。

これはフーコーもそういうふう言っている。実際に、それ以前の時代の作品を見ますと、個人がない作品が圧倒的です。特にアイスランド・サガなどを見ますと、7千名の人名が出ているにもかかわらず、個人の内面は描かれていないんです。大変おもしろいことに個人の内面が描かれていないところ、つまり個人が生まれていないところでは叙景歌も生まれません。風景の描写もない。ここがおもしろいところなんですね。そうすると名前はありませんが、日本の多くの文学者が万葉集は叙景歌だと言っている、特に初期万葉ですが、そのことと関係してしまう。つまり万葉集というものが個人の叙景歌、多くの歌が景色をうたった歌だ、というふうになるとすれば、日本には個人がいたことになりません。そして個人がすでに万葉の時代からいたんだということになると、私の「個人は明治17年に言葉が、始めて「個人」という言葉が生まれて、それ以後徐々に生まれつつある」という説とは違ってしまふわけですね。

自分の説なんかどうでもいいんですけども、「individual」の翻訳の言葉が日本でできたのは明治17年です。それ以後徐々に浸透してきた。しかし、よく人は「個の確立」っていうんですけど、これはやはり具合が悪い言い方だと思うんですね。個なんていうものは最後まで確立しません。ヨーロッパにおいてもそうです。ヨーロッパにおいて12世紀に個人が生まれる。個人というものが生まれたときに、これはもう消すことができませんから至る所に広がっていき、やがて農民や職人層の世界にも広がっていきます。そうしたときに、ときの政府はそれぞれの国の中で、その個人と対決せざるを得なくなるわけです。つまり個人を抑え込んだり、取り込んだりしながら国の施策というものを実現していかなければならなくなるという意味で、個人というものは国家にとっては大変やっかいな存在であったと。従って国家は12世紀以降、各国のやり方に従って個人を統御する、あるいは抑え込む。あるいはそれを少し活かしていく、そういう道を模索してきたわけで、それが近世史の全体だと思っています。私は近世史っていうものはそこで貫かれている、そのところを無視した近世史は近世史なんかにならない、ただのまあ走馬燈の歴史みたいなものだというふうに思っています。ただ物事が流れていくだけだと思います。

ところがですね、個人についてそういうふうに考えていきますと、そうするとルネサンスの頃はどうかだったかということ、あれは「芸術家が個に目覚めたとき」っていうふうに言ってもいいと思うんですね。日本の場合は「個の確立」ってすぐに言うのですが、それは実際に多くの人が、特に評論をやる人たち、フランス文学、ドイツ文学、あるいはフランス文化、ドイツ文化、アメリカ文化等を紹介する人が、日本の現実とヨーロッパの現実を比べたときに、やはりがっかりすることが多いわけですね。日本の方が遅れていると思う。その遅れているという思いを、個の遅れだっていうふうに、個が確立してないからだというふうに感じて、日本では個が確立していないためにこういう状態になっているが、これこれというふうに言う。そうするとですね、私たちはそういう文書を読むと、じゃあ、いつか日本はヨーロッパ並になるのか、いつか日本でもヨーロッパのような個が確立するんだろうかというふうに考えてしまうんですが、私はそうはならないと考えているわけです。ヨーロッパのようにはない。それは当たり前だと思うんですね。例えばドイツとフランスは1つの国になった。もう全体としてEUという国になったから、いずれ性格は、国民性とか言われたものも混合されていくでしょう。混ざっていくでしょう。

先のことは何とも言えませんが、当面は残るでしょうけど、数百年たてばそもそもドイツ語というものは残るかどうかも分かりません。もちろんスペイン語、フランス語が残るかどうかも分からない。ある言語学者と話していたら、そのときにそういう話になりましたので、日本語はどうかになってゆくのかと聞くと、彼は日本は国際化が遅れている分だけ生き残る率も高いでしょうと、まあそういう面もあるかもしれない。少なくともスペイン語はフランス語と劣らず消えていくだろうという話も出ましたが、これはなかなかおもしろい話ですが、それだけではなくて、例えばですね、日本が遅れているということが日本において個人というものが確立されていないからだということになれば、これはもちろん、先行き可能性があるっていうことを言ったことになります。

しかし、ヨーロッパで個人が成立するにあたっては、千年かかっている。12世紀に成立してから現在まで、ほぼ800年から900年、もうちょっとかかっているわけですね。そして、その背後にはカトリックの告解というものがあり、都市の成立という事態もあった。現在のヨーロッパやアメリカの個人はそういう背景を遠くにもっています、今ではその背景を自覚させないようになっている。

社会システムの中に個人はすでに埋め込まれている。これから日本が個を自覚させていくとすればどうなるか。

日本ではですね、例えばこの前、有馬前文部大臣とCSテレビというところで教養について対談をしたんですが、そのときに彼は中教審でも個性を大事にすると主張しているからと言うんですが、それはそもそもおかしいのであって、個性というのは国家の圧力などに対して闘いつけてきたものだ。従って国が個性を授けるという言い方自体が非常に矛盾していて、傲慢なんです。本当に授けられるのでしょうか。例えば小中学校の生徒たちが学校に行くときにですね、私立の場合は特にそうなんですが、先生が物差しを持ってスカートの丈を計るために追っかけ回しているという事態はどういうふうを考えるのか。つまり、個性はまず服装に現れる、というふうに言われているわけで、服装の自由化がされてないところで個性化を尊重するのはおかしいじゃないか、実際に個性化を尊重したことにはならないんじゃないかと、そういうふうな話になってしまう。

私はむしろ、個人が生まれてから教養というものが、個人に密着した姿勢として宣伝されてきたんだと思っているわけです。現在、我々が使っている教養は皆そうなんです。従って大学出である必要があるとか、ブルーカラーであってはならないとかいうことになっている。しかしそうではないんで、いかに生きるかということ和社会との関係の中で考えていく姿勢だとすれば、農民は農作物が出来が悪いときにはどうすべきかを皆で考える。あるいは現在ならば農産物価格というものがあるか、さらに青田刈りをどう考えるかということも含めてですね、今の農業政策に対する批判も含めてさまざまな考察をしなければならなくなっている。これは漁民も同じで、中世のころから鰯がいなくなれば、どこに行ったら獲れるかっていうことを考える。これはいかに生きるかということを考えているに等しいわけで、そういうことを考えない農民は一人もいませんし、漁民もないわけですが、そういう人たちを「教養がある人」とは言わないのです。

それはなぜかという、個人が生まれてからしばらくすると、個人は社会に定着していく。そのときにその個人を位置付けたいと国は思うわけです。そのときに何が役に立つかという、例えば個人の中の、いわば有能な層ですね。有能という意味は国家にとって役立つという意味です。国家にとって役に立つ人間を位置付ける必要があって、すでに中世のころから法学博士がありました、教会法博士もありました、医学博士もあったんですね。

しかし、やがてそこに文学博士なんてというのがいつの時代からか出てくる。この辺りで国家の支配は完結したんだと思いますね。文学というのは、やはり人間の生き方を学ぶ、学問ではないかもしれませんが、そういう分野だと思うのです。それについて国家と深い関係をもつ国立大学とか、あるいは教会が関わって、あなたは文学の面ではもう一人前で超一流の博士ですよって言われて、本人も喜び周りも喜ぶような状況というものが生まれたときに、国家による個人の支配は完結したんだというふうを考えるわけです。

もちろん、それは半分冗談みたいな話ではありますが、一般の人々、特に農民とか漁民はどうかというと、農民や漁民は、先ほど言いましたように、自分たちのたつき（手段）のために生活をし、その生活の中でさまざまな苦勞をして生きているわけですが、それは教養ある人とは見做されなかったんです。そして教養ある人はもっぱら大学の教師とか、あるいは書物を読む人のみに限定された。そうではなくて、素材がなんであれ、自然あるいは自然に近いようなものと取り組んでいる人、そして自分がその仕事を通じて社会と接点をもっている人々は、皆そういう面での教養を位置付け

るべく心掛けているんだと、つまり生きるということが教養そのものなんだ、というふうに私は考えているわけです。

## 大学における教養教育

大学における教養教育はどうあるべきかということなのですが、私は将来構想として、まあ滅びつつある国立大学に対する挽歌も含めてですが、国立大学は今大学院重点化が進んでいる大学が12ほどあるんですね。それがいいという保証はありません。東大総長の蓮見さんと二人で話したときに、東大にはよく出来る学生が3割いるとおっしゃった。私はよく出来る学生とは思わないが、学問の後継者は一橋は1割だと言ったんですが、その意味はたぶんぜんぜん違っていたと思いますね。私は後の7割、8割は何をしていいか分からなくて、どうすべきかを迷っている学生だと思います。大学はそういう人たちに将来の進路が分かるような助力をすることが、教養教育の1つの重要な目的だと考えています。最初の1割については放っておけばいい。つまり、現在の学者たちがやっていることに、なんの疑問も抱かずについていけるような人たちは放っておけばいい。そこでうまくいってもいかなくても構わない。

そこでまあ考え方が違うわけですが、そういう意味で問題は、何ををしていいか分からない学生たちだけではありません。私はこの1年の間にたくさんの大学、国立大学に呼ばれて、独立行政法人になったときにどうすべきかの相談を受けて、いろいろ話し合いをしてきました。地方の大学が多いのですが、地方の大学はやはりその地方にとってかけ替えのない大学になるしか生き残る道はないわけです。例えばこの大学は我々にとっては不可欠だから残してくれと県民、皆が言うような大学にならなければいけない。そのための1つの方策としては地場産業とかさまざまな分野において大学が協力することが当然ですが、もう1つ生涯学習というものを大学の大きな柱にすべきだと言っているわけです。

クリントンは数年前の教書の中で、21世紀にアメリカは全員が高等教育を受けられるようにする財政措置を講ずると言っている。その同じ頃に日本では独立行政法人化とか民営化の話が出てきた。独立行政法人化が本当に優れたシステムであるなら、なぜ国立だけやるのかという疑問があっしかるべきですが、誰もそういう疑問を出さないのは、要するに定員削減をどうするかということの便法にすぎないからだというふうに私も考えているわけです。

ということは、生涯学習というのは死ぬまで勉強をし続けるということで、その拠点としては大学が最適なんです。各県に1つ以上ある。しかもそれなりの人物がいる。しかし、そのためには大学が学問を全面的に変えなければいけないという事実があります。どういうことかということ、国立大学の独立行政法人化という問題に関して、おもしろいことに社会の側からの反発、反対はほとんど聞こえないんですね。生徒からもほとんど声が聞こえない。先生方からもチラホラです。大学として反対声明を出したのは、宮崎大学、鹿児島大学ぐらいなんです。後は反対声明も出していない。どういうことかと言いますと、日本の国民は大学の先生たちの学問が自分たちの生活に不可欠だとは思っていないからです。大学に入学させることは大事だ、国立に入れば授業料が安くて済むし、今の段階では就職に有利だからできるだけそういうところに入れていけども、先生方がやっている学問が我々の生活に大事だとは誰も思っていないんじゃないかと思います。

私は文化功労者の選定委員をやったときに、確か東北地方の高血圧の患者を減らした人がいて、

死亡率が低くなっているんですね。こういう人はまさに文化勲章に値すると思ひまして、もちろんその人が取ったわけですが、そういう学問は人文社会の学問にはほとんどないわけです。いずれにしても、生涯が学習の場だとすれば、それに応える学問を各大学がしなければいけない。今までそういう学問はしてないんですね。私は自然科学のほとんどは業者団体だというふうに考えています。ニューヨークに本店があって、そこに向けて皆集まって鎬を削っているけど、業者が指名を争っているようにみえます。人文社会系は業者団体ではありません。しかしこれは趣味がこうじて職業になっちゃった、従って自分の趣味を生涯持ち続けている、そういう人間の集団で、私もその一人だったわけですから、それがよく自覚出来ているわけですが、そういう状況だと思うんですね。

そういう意味では、国民のための学問というものを、もう一遍考え直す必要があるわけで、人文社会系の学者になる道思い出せば分かるわけです。マックス・ウェーバーは、自分が大学の教師になったときのことを思い出して嫌な思いをしない人は誰もいないだろうと言っていますが、私自身は就職のことではなくて、中身を考えればやはり自分がしたかった個人的な好みだけでやってきたわけです。そしてある段階から少し考えを変えてきたわけですが、全体としてですね、例えば大学における講座を誰もが聞いて分かるようなものにしていく必要があります。

例えば、東大の教養部で釣りの講義をするということが新聞に出ていました。私はいいことだと思うんですが、ただ足りないのは溪流釣りとか海釣りを実技で教えるだけではだめなんです。これだったら専門学校でできる。もし東大でやるのであれば、ローマ時代にまで遡り、あるいは日本の古代にまで遡り、古代から現在までの釣りの歴史をちゃんと教えないといけない。そしてルアーなら、ルアーはローマにちゃんとあるわけで、トリアーの博物館に行けば現在のルアーとあまり変わらないものが展示されている。そして農民戦争の時代には、まさにそのルアーを巡って領主と争いが起こり、これが農民戦争の1つの大きな原因であったことも含めて、釣りは単なる暇つぶしではないということが分かってくるわけで、そういう意味で私は釣りを正課に取り上げることには大賛成ですが、そのためにはそれは総合科目にならなければいけない。その中で、例えば『Complete Angler』でしたか、『釣魚大全』のようなウォルトンの仕事なんかも位置付ける必要がある。

## 生涯学習の場としての大学

教養教育を大学で行なうとすれば、それはやはり同時に生涯学習の場を作ることです。日本の国民は若いときは職業をもっていますが、何らかの形で公的な仕事をしているわけです。しかし、定年後は公的なこととの接触がなくなります。それが非常に問題なんですね。

私は昔、関東学院大学というところから公開講座の依頼を受けたことがあります。もう25年ぐらい前の話です。そのときの説明では、関東学院大学は金沢八景というところにあって、三浦半島の東京湾側なんです。ところが三浦半島の相模湾側というか反対側には、逗子とか鎌倉とかの町があって、その人たちはだいたい横浜とか東京に行ってしまうので、こっち側に人を引き寄せたい。ですから関東学院の先生以外の人にも頼んで公開講座を開いて人を集めたいというので、それだったらもっと工夫する必要があると言ひまして、それはですね、来た人たちが図書館を利用出来るようにする。もちろん公開講座ですから授業を受けるわけで、そういう人は当然、本も読みたくなる。図書館の利用を認める、カードを発行する。さらにお茶が飲めるようにする、コーヒー・紅茶は財政的に厳しければ、多少のお金を払ってもいいから原価でお茶が飲めるようにする。そうしたら関

東学院がただでお茶を出したんですが、結果は見事なもので、5時から始まるのにお昼すぎからもう来ている。そして、おしゃべりをしたり、講義を聞いてから、その辺を散策して帰っていく人もたくさんいる。

つまり日本の大人は定年退職したりした場合、そして家庭の主婦はだいたい公的な場をもってないんです。皆もちたいわけです。ですから病院にしょっちゅう行く、健康保険が利く間は。何が嬉しいのかというと、「なんとかさん」って呼ばれるだけで非常に嬉しいという、悲しい話ですが、自分の名を呼んでもらうことが嬉しいというのを聞いて私はショックを受けましたが、やはりそういう場を大学が提供する。そういう意味では老人に対するアジール（不可侵平和領域）になりますが、それが同時に学問と結びついている場を、もし大学が提供出来れば、生涯学習というものは非常に日本の社会にとって役に立つし、若い学生にとってもプラスになるんですね。

私の経験では、私が教えているときに、例えば、私が生まれる前に卒業した人が来ていまして、受講をしたいというので、「どうぞ」と言いました。そしたら、彼は朝早く来て、今の学生は顔みてすぐにお早ようなんて言わないんですが、彼が大きな声で「お早よう」と言うと、最初は応答しない学生が、しばらくすると「お早よう」と言うようになる。さらに前の先生が書いた黒板の字が残っていて、私がそれを拭いていると彼がパッと駆けてきまして、「私が拭きます」と言ってくれるんです。すると次の時間には学生が拭くようになる。つまり礼儀作法とかそういうものを教えてもらっているわけですね。

最後にちょっと余計な話ですが、彼は最後の授業にやってきました、私の側に来て、「先生には1年間ありがとうございました」と、私もそれで何か挨拶したわけです。そしたら「私は一度も欠席しませんでした。2回だけ休みましたが、それは先生が欠席なさった日に休みになっただけです」と言われて一本取られたわけですが、そこでなにかネクタイピンかなんかをいただいたわけです。

そういう人が一人混じっていることによって、若い学生の生き方も変わってくるという意味で、生涯学習が大切だと考えています。今の日本の大学の多くが研究に専念して、研究で第一線になるってことを言っているんですが、これは、そういう人がいてもいいけど、日本の大学が全体として研究で第一線に立つことは難しい。つまり日本の学界は、江崎さんに言わせると、アメリカではセカンドランナーだと言うんですね。ファーストランナーにはなれない。なれない理由は何かという、創意工夫がないからだと彼ははっきりそういうんですが、私は国民の必要に合致した研究をしているかしてないかだと思います。そうすればそれはファーストランナーなんですね。その辺のところが問題で、それが同時に生涯学習と結びついていくときに、教養教育というものは、おそらく人生全体に渡って完成されてくるんじゃないかと思います。

教養教育についてはもっと言うべきことがあるんですが、時間が限定されていますので今日はこれくらいにして、後は質問等でお受けしたいと思います、よろしいでしょうか。

司会：

ありがとうございました。「教養教育にとって一番大切なことは、学生を発憤させることである」とおっしゃいましたが、私も先生のお話を伺いながらさまざまな形で発憤させられました。それでは、どんなご質問でも結構です、どうぞご自由にお聞き下さい。せっかくの機会ですので、ご遠慮なくどうぞ。どなたかいらっしゃいませんか。

杉江：

あまり理解力がある方ではございませんので、とんでもない質問かも知れませんが、つい最近、仲間と話をしていたときに、特に私立大学の場合ですと、学生の低学力化ということが非常に問題になっています。英語を6年間勉強しても英会話すら出来ないとかいう話があるけれども、実は他の教科はもっとひどいんじゃないかなって話になってまいりました。英語はまだいい方じゃないかという話をしています。そういった中での教養教育ということを考えなくちゃいけなくなってくる訳ですが、まあ私どもはある程度の基礎知識をもっているという前提からどうしても抜けきれないところがあるんですね。そういう中でも、やはり先生のおっしゃった、例えば人々に不可欠な学問というようなものの模索というあたりが、なかなか見当がつかない部分があるんですが、少しその学生の低学力化と関わってお話を伺えたらと思うのですが。

阿部先生：

はい、新聞とか雑誌とか、さまざまなメディアを通じて、大学生の学力が低下しているということが言われているわけで、ときどき私もそれについて質問を受けることがあります。私はそれについてはこういうふうに答えることにしているんです。1つは、だいたい受験科目になっていない教科を今の学生たちは勉強しない。従って数学を課さなければ分数が解けない学生が出てきても不思議はない。もちろん高校段階ではある程度は解けるでしょう。しかし受験生、受験を過ぎた、大学に入った段階で分数が解けない学生が出てきても不思議はないと思います。

実際に受験教科になっていない場合、医学部でも生物を課していないってということが反省されて、今言われていますが、問題は大学生にはこれだけの学力が必要だという、その判断基準はどこからきたかということなんですね。おそらくこれも私の正確ではない知識からですので、後で間違っていれば訂正していただきたいと思いますが、私はやはり戦前から前後にかけて日本の大学が特定の官僚を養成する必要があった。そして最小限は兵士の供給です。プロシアでもロヒョーっていう人が教育ということを重視して、民衆学校をつくることを言い出したんですが、これも読み書き、算盤なんです。兵隊は最小限度の読み書き、算盤が出来ないと兵隊になれませんので、最小限の民衆教育というものをしようとしたと言われていたわけで、ロヒョーという人が果たして現代の我々のいう民主主義的な思想の持ち主であったかどうかは私は分かりません。しかし、時の需要に合っていたことは言えると思います。

学力の低下というときに、その人にとってそれが非常に生活上不便であるかどうかということ、例えば分数が出来ないから困る分野があるとすれば、それはその人にとっては死活の問題ですから重大ですが、日常生活で使わないような分数とか、そういうものをどうしても知っていなければいけないという発想は、ある特定の人間を養成するという立場からきたものだと思うんですね。

原始時代に戻っていいとは思っているわけではないのですが、やはり考え方としてはそこまで戻ってもいいんじゃないかと私は思います。つまり基礎になる数学とか国語とかの、ある程度の能力があって、これこれのものは全員が読めるんだということは理想だとおっしゃると思いますし、私もそういう気持ちもないではないんですけども、しかし学生たちが知的な関心を失っているということの方が大事です。つまり高等学校までの教育の中で、そういう授業を現実には授けることが

出来ない。従って学生たちは嫌なものとして学んでいる。

例えば教科書問題が1つの典型的な例ですが、今は右と左のどちらかよく知りませんが、そういう人たちが教科書について争っているわけです。つまり教科書は自虐史観だという人もいるし、新しい教育が必要だとかいろんなことをいうわけですが、私はその間に入って一遍だけ書いて両方からやられたわけですが、どういうことかという、教科書がおもしろくない、一番大事なことは教科書がおもしろくないってということだと。教科書は読むに耐えない。つまり自分で買って自分で読もうという気にならないものが教科書で、これを受験があるが故に強制的に買わせているにすぎない。これが誰もが読みたくなるようなものであれば、それは自ずから知識がついていくんです。

しかし、数学の、他の分野もそうですけども、何かこれが絶対に必要であるかのような、そういう前提で教えているからそうなるんだと私は思うんですね。もし特定の教科を、例えばある大学で、この大学でもいいんですが、これこれの人間を育てたいと、そのときにはこれこれの学問を修めてきてほしいという場合は、当然それを要求すべきで、それに合わせた入学試験をすべきだと思います。そしてそこで選抜されるわけですね。今ではそれをしないで、入試には数学を採用している学校は非常に少なくなっている。しかし、後で数学が必要になると、場合によれば予備校の教師を呼んできて数学の補修授業をしたりしている。さまざまな応急手当をしているようですが、まあそういうことも必要になってくると思います。

ですから私はその点に関して言えば、学力の低下そのものが問題なのではなくて、どういう人物を社会が求めているかということと関わってくるんじゃないかと。つまりかつては大学卒業の学生をエリートとして位置付けようとしたわけです、文部省は。今はあまりにも増えてしまったので大学院生をエリートとして位置付けようとしているように見えますが、これは私あり得ないと思っています。つまり人文社会系の大学院に行く人は学者志向なので、これは一般的に日本社会の一般の人々とはたぶん並ばないと思うんですね。非常に特異な志をもった人たちが多いんです。そういう人が日本の社会のリーダーになるとは思えないんですね。そういう意味では学部がやはり中心になるべきで、そのときに果たして分数が必要かどうか、これはそれぞれの判断によると思います。

司会：

よろしいでしょうか。では、他にございませんか。

長滝：

大変迫力のあるお話で、非常に刺激を受けたんですけども、先生は教養教育をどのようにするかということについて、我々に対してある意味で非常にハードルの高い課題を話されたと思うんです。それは、人文・社会・自然の垣根を超えて、それを総合するような知を学生に提示していくんだと。そのためにはあまり若い、教養がないような教員はやるべきではないというような話で、非常に耳が痛かったんですが、そういった教養教育と、先生が「教養」と定義されている、「教養がある」っていうことで先生が定義されている「自分が社会の中でどんな位置にあるか、社会のために何ができるか」ということを知っている状態とは、具体的にどのように結びついているかということについて、少しお話いただきたいのですが。

阿部先生：

具体的に言いますと、ちょっと言い過ぎた面もありますが、若い人がだめだと言っているのではないんですね。自分の経験を言いますと、私は確か29歳のときに国立大学の講師になったんです。それから現在まで、一昨年まで教師をやっておりましたが、そこで出ていった学生たちのなかで、研究者となった学生だけです。非常に半端な頼りにならない数字ですが、研究者になった学生の数は一番最初のときが一番多いんです。そして優秀かどうか分かりませんが、一人前の学者になった人は私が20代の後半から30代前半に育てた学生が多いんです。そしてその頃は小樽商科大学というところにおいて、最後は一橋大学にいたんですが、そのときに育てた学生はその最初のころに比べるとそれほどの迫力もないし、広がりもない。

20代の頃と比べて50代半ばになれば知識は増えているでしょうし、いろいろと方法なんかについても知識があるんだろうと思いますが、問題はそこではないんですね。私が気がついたのは、やはり教師自身の対象と取り組む姿勢みたいなものが常に伝搬していくんで、それは若いときの方がいいという面があるんですね。だから私は若い人がだめだというのではなくて、そういう姿勢をもっている人、つまり対象と取り組む姿勢が非常に、なんとというか勇気があるというか一生懸命やっている人、これは学生評価の場合もはっきり出るんです。その点で一般の先生とかなり意見が分かれることがあります。学生というのは、私の考えでは、自分がどんな怠け者でも、きちっと勉強をしている教師は分かると思うんです。私はそういうふうに確信しています。

そして、もう1つ、今のご質問に即して言えば、教養教育というのは教師が与えるものではないということなんです。つまり一人の教師が最大限15人ぐらい、あるいは10人でもいいんですが、少なければ少ないほどいいのですが、しかしあまり少ないと具合が悪いので、まあ10人ぐらいを最低限もってですね、そこで好きな本を読む。私がやったのはそれなんです。つまり私は英語の本で『ヨーロッパにおける個人の成立』という本を読んだわけです。英語の本なんですが、学生と一緒に読みます。するとそこでいろんな質問が出てくる。その質問に対して私も答えたり、生徒も答えたりしながらやっていくってことで、それは生徒を中心にやるんです。

本を読むことが目的ではないんです。彼らが自分を見付けることが目的で、そして一人一人が将来どういうふう生きていくか、どういう職業を選ぶかも含めて、そういう見通しをつけることが1年で出来るかどうかなんです。出来なければもう1年やればいい。問題は教養教育というのはなんだか決まった形の内容を学生に与えることではないということなんです。つまり、教師の生き方が問題になるし、同時に教師の勉強の仕方も問題になるし、教え方も問題になる。と同時に、学生がどういうふう今後生きていくかということのサジェストを与える。そういうチャンスを広げる、これが教師の仕事だと思っているんです。ですからそういう意味では普通の、いわゆる専門科目の講義とは違うと思うんです。そういう意味ではやはり円熟も必要になってくるわけです。ですから矛盾したことを言っているわけで、対象に対する取組みの真摯さとか、そういう点では若さが必要だが、円熟さは歳、年齢が必要だという矛盾したことを言っていますが、もちろんどちらを取るかとすれば若さを方を取った方がいいと私は思いますね。若いときの方が可能性がある。

たださっき言ったさまざまな学問分野を1つに、例えばリベラル・アーツみたいにまとめていくとすれば、研究者同士が常日頃から、その問題について話し合っているということが必要だと思いますね。つまり一般教育というのは皆いやだったんです。私は一般教育担当科目1科目で12年間小

樽で過ごした、1科目だけの講義で12年いられたという幸せな人間だったんですが、そのためにやはり講義ノートを一人で一生懸命に作っていました。仲間があまりいませんから、そのときはそういうことを考えませんでしたから、物理の人と一緒にやろうなんて思いもしませんでした。一人でずーっと考えていましたが、今は状況が違うと思うので、やはり来年度の講義を担当する人が話し合っ、先ず飲むことから始めてもいいと思いますね。

つまり、やはり学問というものを、なにかこう特別なものとして位置付けてしまうと、鯨ほこ張ってしまって、つまらなくなっちゃうんですね。ですから、飲んだり食べたりすることから始めて、一般教育の担当者が物理も国語も歴史も心理もみんな、体育も一緒になって、どういう授業をしていくかっていうことを話し合う中で、共通の本を読んだりするっていうこともあり得るし、アメリカなんかですとアスペンの研究所では、例えば民主主義とは何かっていうことを未だに議論している。これはトックヴィルの書物を読むんですが、しかしそこには財界人、学界人、著名な人、それからジャーナリストや学生まで来るわけですね。日本のいけないのは、民主主義が分かっていると思っている、政治家もみんな分かっていると思っている。しかし実は分かっているんですね。

ですから例えば、あるゼミナールではフィリピンに行って、フィリピンではなぜ開票にこれだけ時間がかかるのかを自分で行って見てくる。タイに行って、文字が読めない人がなぜ投票に参加出来るかも調べる。ヨーロッパやトルコも行って調べてきて、そして日本に帰ってきて日本の投票事情とか開票事情を調べていくっていう、そういう形で民主主義の勉強をしているグループがありますが、そういう授業が必要になるんだと思うんですね。

そういう意味では、私はやはり全然違う分野の人たちとの間の共同作業、これはやはり複数の先生方がそういう意味での共同研究の場を作ることから始めるのが、一番よろしいのではないかと思います。

司会：

まだまだご質問があるかと思いますが、そろそろ時間ですので、最後に短い質問を1つだけ受けたいと思いますが、いかがでしょうか。

よろしいでしょうか。それでは予定の5時になりましたので、これで講演会を締めさせていただきます。阿部先生、どうもありがとうございました。